

『嵐が丘』試論その1：ネリー・ディーン再考

—— キャサリンの「隠れた敵」 ——

中 尾 知 代

*"Worthy Mrs Dean, I like you, but I don't like your double dealing"*¹⁾
 Heathcliff to Nelly <Ch.22>

序 ネリー・ディーンに対する様々な評価

ネリー・ディーン——嵐が丘においてその幼少時代・娘時代を過ごし、他の早世する登場人物に比べて遙かに長い期間を生き、その半生を作品中の全事件と共に送ったこの女性は、『嵐が丘』の語り手¹⁾としてはよく知られている。しかしその人物像についてはあまり問題にされてこず、ただ平凡で善良な人間として片付けられてきた。とはいえシャーロット・ブロンテのようにネリーの性格を「真の慈愛と家庭的な忠実さの典型」²⁾とのみ捉えようとすると、時折彼女が見せる冷淡さ、無理解、覗きや御節介な介入、自己弁護など、いくつか説明のつかない性格や言動が残ることになる³⁾。

この矛盾を説明しようとする批評家達はこれまで、おおまかに分けると以下の様な三通りの解釈を施してきた。

一つは、ネリーを物語世界の有機的な一部としてではなく、物語を成立させるための一種の装置として捉えるものである。この場合、ネリーの言動は物語が進行するため、あるいは事件全ての目撃者として物語を語るがためという事になり、作者は彼女の登場人物としての性格より機能を重視したとされる⁴⁾。

だが最も広く受容されているのはセシル、ケトル、Q.D.リーヴィス、B.

ハーディなどに代表される、ネリーの冷淡な言動や幾つかの過ちは全て彼女の視野と洞察力の限界から起こるとする解釈である。この限界は彼女が平凡でノーマル、健全で实际的という、‘普通の’人物である故に持つ、保守的／因襲的な道徳性及び常識的感性に起因するものとされ、彼女は概ね善意に満ち、同情心にあふれた乳母と解釈される。この見方によれば、ネリーは周縁的なマイナーキャラクターとなり、その作品世界における意義は「物語に地上的な性格を与え、信憑性を高める」⁵⁾事と、「主要人物の特異性、極端さを測るための‘普通さ’の基準／標準」⁶⁾という機能的な点に集約される。

この保守的という部分を重視して、ネリーに新たな定義を与えたのが近年のフェミニズム批評である。この解釈によるとネリーは「父権制社会の規範を擁護する家政婦」⁷⁾あり、既製の社会制度の枠からはみだそうとするキャサリンや、はみださせようとするヒースクリフを危険視し、肅正・排除せんとする「男根の母」⁸⁾（家父長制度推進の手先／代理者としての母親）だということになる。

ネリーの性格をどう捉えるかは、彼女の諸事件との関わり方の度合いをどう考えるかという点にも関連する。嵐が丘の悲劇を全てネリーの悪意に帰し、彼女をイアーゴウに比すべき悪人だとするハフリーのやや特殊な解釈⁹⁾やフェミニズム批評を除いては、セシルのように関わりを全く否定するか、（彼の“ネリーは巻き込まれていない”という説はつとに有名である）¹⁰⁾、ある程度の関与を認めても、悲劇性はキャサリンやヒースクリフに内在していたとしてネリーの関わりに本質的／決定的な要素を認めないものがほとんどである¹¹⁾。

以上のどの説をとっても共通するのは、ネリーを非個性的でフラットなキャラクターと見做す点¹²⁾であるが、本当にそうなのだろうか。この作品には意外とネリー自身に関する情報量が多く、その生い立ちも、喜怒哀楽を伴う様々な彼女自身の体験も随所に記されている。それらを丹念に拾っていくとき、例えばマシスンやB.ハーディの言うような「落ち着いた澄んだ気

質」³³⁾で「冷静で理性的」³⁴⁾な標準的人物像とは随分と異なる、個性的でラウンドなキャラクターを持つ一人の女性が浮かび上がってくるように思われる。

この小論は、ネリーに関する個人的な情報を集め、その経験や感情を追い、再編成してネリーの人物像を浮かび上がらせ、それによって、彼女の性格、作品世界における意義と重要度を再検討することを目的とする。まず彼女の生い立ちから確認してみることにしよう。

第1章 登場人物としてのネリー、その特質

ネリーはよく評論で‘老乳母’とか‘老家政婦’などと記述される。読者の前に初めて登場する際に四十五才であるため、このような印象が強まるのであろうが、前半のプロット（1章～17章）における彼女の年齢は幼少時代から二十代半ばまでと比較的若い。クライマックスの12～16章で活躍する時は二十七才で、『嵐が丘』を執筆していた作者エミリーとほぼ同じ年頃に設定されていることをまず確認しておきたい。

ネリーの個人史を概観すると、その立場は降下－上昇の2次曲線を描いている事がわかる。子供時代から二十五才に至るまでが降下であり、スラシュクロス屋敷に移ってからが上昇の始まり、そして物語を終える時点ではスラシュクロス屋敷の準・女主人、いや実質的な女主人に収まり、彼女の言葉を借りると「イギリス中で一番幸福な女」となる。

母親がアーンショウ家の長男ヒンドリーの乳母をしていた関係で幼少時より嵐が丘邸に出入りするようになったネリーは、遊び仲間としてヒンドリー（ネリーと同一歳）キャサリン（八歳年下）とほぼ対等な位置でその子供時代を送る。使い走りなど召使的な仕事もするものの、アーンショウ氏が旅に出る時も自分の子供等同様土産を約束するなど、召使としては特権的であり、いわば準・娘としての位置を占めていた。だがネリーが十四歳の時、他なら

ぬこの時持ち帰られた‘土産’、即ちヒースクリフによって彼女の位置と権利は侵害され、彼女はこの新参者の世話係として彼よりも低い位置に甘んじることが余儀なくされる。ヒースクリフが到来した際その世話を拒否し、彼が出ていくことを願ったネリーがアーンショウ氏に一旦家を追い出されたという短いエピソードは、彼女がヒースクリフに文字通り‘押し出された’ことを示している。主人の愛情と遊び仲間キャサリンの関心を一身に集めるヒースクリフに対して彼女が敵意を抱いていたことは、同じく位置と権利を侵害されたヒンドリーに加担してヒースクリフをいじめたことや、主人の彼に対する偏愛を非難する態度から明らかである。

但しこの時点では位置が下がったといっても、ネリーの重要度が減ったわけではない。アーンショウ夫人亡き後は家族の中の最年長の女性として家政に携わり、アーンショウ氏の臨終場面から分かるように、家族用の居間で過ごせる家族の一員であった。然るに彼女が二十歳のときアーンショウ氏が死に、ヒンドリーが妻フランセスを伴って帰還した時点で、彼女は準・娘から召使という位置に地位／立場が降下／後退することになる。ネリーにとって幼馴染みでもあるこの新しい主人は、ヒースクリフを下男の身に落とすだけでなく、ネリーにも家族用の居間ではなく奥の台所に起居するように命じる。第1章でロックウッドが言及するように¹⁾、この居間は‘家族の居場所’であるため、「奥の台所(back kitchen)に行け」と言われることは「分をわきましろ(back to your place)」と同義なのであり、即ちネリーを召使として扱うという宣言なのである。ネリーはフランセスに対して冷淡な態度を取っているが、それは彼女が説明するような土地の気質の故というより、ヒンドリーとの心理的／物理的距離を生む契機となった女性に対する反感に由来すると考えられる。

上の二人の侵害者に対するネリーの反感や対抗意識は、ネリーの出自と階級を考慮すると一層理解しやすい。ネリーが自分のことを「貧乏人の娘」と呼んでいるために見過ごされやすいが、彼女の出自はいわゆる召使階級の

それではない。ジョウゼフなど方言を使う他の召使達とは全く異なる標準的言葉遣いやヘアトンの教育係としての能力、読書量の多さが示す彼女の教養の高さは、彼女の元々の身分がアーンショウ家のそれと同じヨーマン階級に属していたことを示している²⁾（ネリーの母が乳母として、そしてネリー自身がヒンドリーやキャサリンの遊び仲間としてアーンショウ家で容認されていたという事もそれを裏付ける）。土地を失い没落したヨーマンは他家に稼ぎに出ることを生計の手段としたが、ネリーの家の場合もそれに当たる³⁾。ヒースクリフやフランセス（二人とも家柄・財産共にない'nameless'な人間たち⁴⁾）に対するネリーの反感や、後に見るキャサリンに対する対等意識にも、この本来の身分に基づくネリーなりの自尊心が下地となっている事を忘れてはなるまい。

＊

このような地位の下降と合わせて見ておきたいのは、立場が周縁化し、存在が希薄化する際に彼女が家事／養育を自己主張・自己保存の手段としていく過程である。ネリーにとって家事育児は、単なる仕事以上の意味を持つ。それは自己同一性を確立するための媒体であり、個人ネリーの自己確認の為の重要な基盤であり、同時にそれは彼女の傷付いた自意識と優越感を修復／再建するのにも役立つ。次にあげるのは彼女がヒースクリフを看病した時の記述である。

彼は回復し、お医者様はこれは本当に私のおかげだと断言し、私の世話ぶり(my care)を誉めてくれました。私はこの賞賛を大いに得意に思い、この子供(this being)を通して(by whose means)賞賛を得たもので、彼に対する態度も和らげ、こうしてヒンドリーは最後の味方を失ったわけです。

（4章,p.79）

ネリーの準・娘としての特権は減少しても、その家庭的能力は医者という権

威の賞賛をもたらす事により、周囲に対する彼女の存在の重要性を示し、かつ自分の存在意義を確認する手段として有効だ。同時にそれは、いわば‘敵’であったヒースクリフに対してナース（乳母／看護人）として優位に立ち、保護者－被保護者の関係を作り出すことを可能にしてくれるのである。

家事もまた、彼女の存在意義を確認する重要な手段となっていた事が、後に回想されるアーンショウ氏の彼女の家事能力に対する賞賛からも分かる。主人／父である氏が「しっかりした娘っこ」だと誉めて褒美を与えてくれたこと、それは彼女の存在意義の確認であり、同時に主人の悩みの種である悪戯娘キャサリンに対する優越性も感じさせてくれる。召使に立場を限定されて後も彼女の家事における有能さは体が弱く家政に興味を示さないフランススに対する一種の優越性を保証するし、ヒンドリーに放任されヒースクリフやキャサリンが野蛮化していく時もネリーは重要な保護者となって、彼等に対して「力」⁵⁾を持つようになっていく。要するに彼女は“back to her place”したその場を拠点に彼女なりの權威を育児／家事で築き、希薄化・周縁化した自己を立て直すわけである。

ところが、野性児キャサリンがスラッシュクロス屋敷滞在を機に洗練され、主家の娘として尊重されるようになった時、二十歳のネリーにとって自尊心の回復はこれまでより難しくなる。もともと「教区一番の明るい瞳と愛らしい笑顔の」キャサリンに対してネリーの方はジョウゼフの言葉によれば「男が見とれるような別品でもねえから、男の魂を奪うようなこたできねえ」という容姿の持ち主であるが、キャサリンの淑女への変身によって、この外見の差異はさらに開いてしまう。第7章の冒頭でキャサリンが帰宅した際の描写は、この二人の若い女性の外見や立場の違いを明確なコントラストで示している。華美な服と「ずっと家の中にいたため、驚くほど」白さの増した手をしたキャサリンに対し、料理をしていたネリーの方は同じ白でも「全身小麦粉まみれ」の姿だし、淑女のようだと賞美される前者に対して、後者ははっきりと「召使」と呼ばれ、前者のお付き女中の役を割振られる。家族の注目

を一身に集め、ちやほやされているキャサリンと、誰にも顧みられず台所に下がり、歌で自分を励まそうとしているネリーの姿の対比も厳然としてある。次にあげるのは、歌の後の描写である。

そういう次第で、私はひとりぼっちでおりました。温めた香料の立てる良い匂いを嗅いだり、輝く (shining) 台所用具や磨き上げて (polished) ひいらぎを飾った時計、香料入りの温めたエールを夕食の時いつでも注げるように盆に並べた銀の杯、そしてとりわけ、私が特に念入りに手入れしたもの——磨きあげ、掃き清めた床の、一点の染みもない清さ (speckless purity of my particular cares) に感嘆しました。私は心のうちでそれらの一つ一つに当然与えられるべき賞賛 (due inward applause) を与えました。

(7章, p.95)

このいかにも家庭的な側面を表すかのような言葉を、この直前の掃還したキャサリンの風貌の描写と合わせ読むと、そこに潜むネリーの孤独感、キャサリンへの対抗意識、また自己を回復せんとする努力を見てとることができる⁸⁾。例えば一つ一つのアイテムを数え上げるやり方はキャサリンの服装の描写の細かさと対応し、「輝き出る姿」「真っ白なズボン」「磨き上げた靴」という表現も類似している。またネリーの「当然与えられるべき賞賛」は、キャサリンが家族から受けている賞賛（キャサリンの洗練は自分で成し遂げたものでない故ネリーからみれば due applause ではない）に対抗するものだ。本来ネリーの働きに対して与えられ、彼女の自意識を満足させるはずの主人からの賞賛 (outward applause) をキャサリンに奪われてしまったネリーが上の引用部分の後アーンショウ氏から与えられた過去の賞賛を回想するのは、亡き主人の権威で自己を回復せんとする試みである。さらに、ネリーが己の本来の身分を思い起こすことで矜持を保ち、今や「威厳のある

(dignified)人物」となったキャサリンに対抗せんとする姿勢が、ヒースクリフを励ます次の様な言葉からうかがえる。

「...あんな、キャサリンが自分よりも大事にされたので、妬いた(envious)んでしょ」彼にはキャサリンを妬むという気持ちは理解できないものでしたが、彼女を悲しませたということははっきりと飲み込みました。...「傲慢な人間は自分で悲しみを作ってしまうものなのよ。...キャシーが立派な服を着ているからといって、他人になってしまったなんて思わないことよ。...心がけさえよければ顔まで美しくなるよ。...もし私があんななら、自分の生まれについてはうんと高い身分にしとくわ。以前の自分が何だったかを考えれば、勇気と威厳(dignity)が湧いてきて、百姓なんかに押さえつけられているのも平気になれるわ」

(7章, pp.96-8)

これは実はネリー自身に向けられた激励と言ってよい。容姿や服の差など外見の差異を中身で補うのだという気概、ヒースクリフ同様ヒンドリーに押さえつけられている抑圧感を自尊心で跳ね返そうとする姿勢は彼女のものであるし、ヒースクリフが理解できない‘妬み’も他ならぬネリー自身の感情と言える⁷⁾。ヒースクリフの受けた衝撃は変貌したキャサリンに対する違和感とヒンドリーの侮辱によるものであって、妬みではない。ネリーはここで「キャサリンが自分より大事にされる」事への自分自身の苦々しい思いを彼に投影して語っているのである。

*

ここで一言ネリーの特質とされる因襲的価値観について触れておこう。彼女の義務感や道徳意識の強さはよく指摘されるところだが、これらもまた彼女の生い立ちと深い関わりを持っていると言える。これまで見たように、ネリーは仕事を持つ人間として比較的早期に社会化されている。その中で彼女

の自己確認は、自己の内部の欲求を満たす事ではなく、他者、特に主人から課される仕事即ち‘義務’を忠実に果たすことによって成されてきた。逆に言えば義務を果たす事——同時に‘義務を果たしている正しい自分’を確認する事——は彼女の自己確認の重要な手段なのであり、賞賛という形の外部からの承認が減少するにつれ、いよいよ重要なものとなるのである⁸⁾。

ネリーに対して義務を課すものは人間のみならず、神という主人も含まれる。神の権威への服従や聖書の教える義務の遵守をネリーが重視している事、キリスト教が彼女の奉じる道徳律の基盤となっている事は、彼女がイザベラや少年時代のヒースクリフを諷める時の言葉⁹⁾や死ぬ間際の彼に信仰を取り戻せと忠告する際の言葉¹⁰⁾から明らかだ。ジョウゼフの偏狭な信仰の陰に隠れがちだが日常のネリーの思考法や言葉遣いはキリスト教的信条に強く色付けされている。この世の主人が不当な評価しか与えなくても神は、最終的に彼女の働きを賞賛し、報いてくれるはずの存在——外的条件の不公平を補ってくれるはずの存在として重要である。つまり信仰は、孤独感と抑圧感に耐えて独力で自己を回復せんとするネリーにとって内面の強い支えとして必要なものなのだ。

ネリーが持つ義務感、道徳意識、そして信仰はそれ自体は悪い資質ではないが時に問題の種となる。例えば何を義務と考えるかがネリー自身の判断で変わり得る為、義務の遂行も時に彼女の欲求を押し通す為の隠れ蓑となり、自分の正しさに疑いを持たぬ場合彼女の独善性を生み出すものとなる。信仰も又同じだ。本来自己の支柱あるいは他者を愛する基盤であるはずのネリーの信仰も、次章で見るように時に人を裁く道具や自己正当化の根拠となり、やはり彼女の独善性を強める働きをしてしまうのである。

以上ネリーの基本的特質について見てきた。家事／育児のネリー特有の意義、及び彼女の抑圧された対等意識と孤独感を念頭に置きつつ、『嵐ヶ丘』におけるネリーの捉え直しのポイントとして、次章では前半の重要箇所を特にキャサリンとネリーの関わりに焦点を当てて解釈し直してみよう。

第2章 ネリーとキャサリンの相克

『嵐が丘』前半のヤマ場である第11～15章は通常キャサリン／エドガー／ヒースクリフの相克として読まれるが、その陰にあって三者の相克を引き起こす原因となっているところの、ネリーとキャサリンの葛藤が往々にして見過ごされてきている。

ネリーとキャサリンの関係は、ネリーにとって常に外面的な主従関係と内的な対等意識の両面の葛藤を伴う。まず主従関係の緊張に注目してみよう。ネリーより年下で本来対等な立場であったキャサリンが女主人としての権威を主張する一方、ネリーが服従せず、逆に己の対等・優越性を主張し返すという対抗関係はキャサリン八才、ネリー十五、六才の頃のままごと遊びの記述にその原型が見られる。

遊ぶとき、¹⁾彼女〔キャサリン〕は小さな女主人役をするのが非常に好きで、すぐ手を振り上げて遊び仲間に命令します。私はぶたれたり命令されたりするのを我慢なんかしませんでしたから、彼女にそう思い知らせてやりました。 (5章,p.83)

キャサリンがスラッシュクロス屋敷滞在後に洗練されて戻ってからは、ネリーの側の反感は以前より明確になる。「誰ひとり並ぶ者の無いこのあたりの女王」²⁾であるキャサリンを評する「傲慢」「頑固」「高慢」「プライドが高すぎる」等のネリーの言葉が示すとおり、彼女は主人として立とうとする年下の娘に対して苛立ち・不満を抱き、キャサリンがネリーに対して「昔馴染みに対する愛情」を抱き続けても「どうしても好きになれない」「彼女を愛してない」とはっきりと述べている。第8章のエドガー求婚の場の直前にあるエピソードにも、子供時代と同じ構図が見て取れる。来客の際は召使は居間から出よと命令するキャサリンはそれを無視するネリーに立腹して彼女をつ

ねるが、それに対してネリーはエドガーを観客に仕立てた一種の芝居を打ち、故意に大げさな身振りと呼び声を上げてキャサリンの粗暴さを引き出し、その権威を辱める。その際のネリーの言葉にも彼女の対等意識は表されている。

「まあ、お嬢さん、なんて卑劣なやり方でしょう！ あなたに私をつねる権利などありはしないし、私は我慢なんかしませんよ！」

（8章,p.111）

この主従の対立が子供時代のそれと異なる点は、ネリーの言動がキャサリンの内面性に対する反感にも促されているという点である。両者の対立は内面の自己の基盤において相容れない人間同士の対立という様相をも呈し始めるのである。ネリーが上のような行為に出たのは元々キャサリンの交際の仕方が気に入らないからだ、それは「彼女を愛しておらず、時々その虚栄を懲らしめる(mortify)のをむしろ楽しみにしていたから」というネリーの言葉が示す通り、キャサリンの行いがネリーの大切にす道德感とそぐわないからである。ネリーがキャサリンを無節操の者とし、自分を道徳的に正しい者と見做していた事は、彼女がキャサリンに殴られたあと、やはり殴られたエドガーをキャサリンから離そうと呼びかける次のような言葉からも明らかである。

彼〔エドガー〕は自分の偶像が犯した嘘と暴力という二重の非行にひどい衝撃を受け、唇をわななかせながら、自分の帽子を置いたところに歩いて行きました。「それでいいんだわ！」私は内心呟きました。「警告を聞いて去るがいい！ 彼女の本性(genuine disposition)の一端を知らせてやったのは親切というものよ、彼はためらい、私は彼を力付けることに決めました。「お嬢さんは恐ろしく我が儘(wayward)なんですよ、ぼっちゃん、さっさと帰った方が身のた

めですよ。でないと私達を困らせようとばかりに本当に病気になったりするんだから。」軟弱な少年は、…半分食いかけの小鳥を残して去れない猫も同然でした。ああ、この少年を救う手(saving)はもう無い、と私は知りました。宿命付けられて、その悪運に飛び込んでいくだろう! 事実その通りになりました…。 (8章,p.112)

ネリーにしてみればキャサリンは“wayward”³⁾、即ち‘the Way’ (キリスト者の取るべき道) に外れた邪道の者であり、自身は迷えるエドガーの魂を偶像キャサリンから守り救う正義の天使の立場に居る訳である。

ネリーのこのような内面的な基準によるキャサリンに対する否定的感情は、このあとに続く有名なキャサリンの告白場面で一挙に強まり、明確になる。ネリーがこの告白に対して、最後に「あなたのナンセンスな話から私に分かる事があるとすれば、あなたは結婚に伴う義務について無知なのか、さもなければ性悪で無節操な娘だということです」と言う部分は、通常ネリーが因襲的道德感の持ち主で想像力に欠けた平凡な人間である証拠として取り上げられてきたが、念頭に置くべきは、第1章で見たように、ネリーにとって‘義務’を守ることは内面的にも外面的にも彼女にとっての大切なアイデンティティー確認の基盤となっているという事だ。言い換えればネリーは生まれつきのモラリストではなく、自己形成の過程でモラリストになることを選択し、モラリストであり続けることで自己保存を図っているのである。それに対し、キャサリンは告白の中でヒースクリフを「自己を越えた自己の存在」だとし「もしあらゆるものが一切滅び去っても彼さえ残っていたら私も存在を続けられるわ。でも、もし他のものが全部残っても彼が消えてしまったなら宇宙全体が全くの他人になってしまう。自分がその一部だなんて思えなくなるわ」⁴⁾と述べる。キャサリンは己の内奥の超越的自己を感知するにも、世界の有機的な一部分としての自己を確認するにも、全面的にヒースクリフを通さなくてはならない——極言すればキャサリンの自己同一性は

ヒースクリフとの同一性の確認によって成されている。つまり、この告白場面は表面こそモラリスト・ネリー対イモラル（あるいはアモラル、プレモラル）・キャサリンの対置のようなのだが、内実は異なるやり方で自己を認識し保持しようとする人間の対立である。ネリーが感じるのは、キャサリンの自己のあり方が自分と異なること、そしてキャサリンの社会規範への違反はそのままネリーが価値を置く存在基盤を侵害し、ひいてはネリーの存在に対する脅威だということだ。ゆえにキャサリンは、社会にとって許せないというよりネリー自身にとって許し難い存在として認識され、ネリーは怒りと憤りを感じるのである。「私は膝に顔を埋めてくるキャサリンを突き退けました。彼女の余りの愚行に我慢ならなくなったのです！」この激しい動作は、ネリーの感情が「常識にはずれるのはよくない」という様な一般的判定でなくて、彼女自身の個人的な反感に根差すことを示している。

これまで見てきたこの二人の女性の価値観と主従の対立ぶりを考慮すると、論議的になっている問題、つまりヒースクリフが立ち聞きして中座するのを黙過したネリーの行動⁵⁾も理解できる。この箇所を直前にネリーがエドガーを「偶像」⁶⁾ キャサリンから「救おう」として彼を積極的に遠ざけようとした事実と重ねれば、ここでもやはりネリーはキャサリンの“genuine disposition”である（とネリーには感じられる）虚栄を、ヒースクリフの立ち聞きを邪魔しないという消極的な方法で彼に知らせ、ヒースクリフを偶像キャサリン——ネリーは他の箇所でも二度、キャサリンはヒースクリフの“偶像”だと述べる——から遠ざけようと暗黙の「警告」を送っているのではないだろうか。

＊

ヒースクリフ失踪の衝撃から熱病にかかったキャサリンは、スラシュクロス屋敷での静養の後、ネリーに向かって女主人としての態度を取るようになり、それを快く思わぬ彼女との間は一層緊張する。ネリーは立腹した際にヒースクリフ失踪の原因としてキャサリンを非難し、子供時代のように「思

い知らせ' ようとするが、かえって「ただの召使」の扱いを受ける羽目になる。'ただの' と強調する点や「奴隷のようにキャサリンに踏みつけられる」と言うネリーの表現には彼女の不満、屈辱感、傷付けられた対等意識が読み取れる。この主従間の緊張は三年後キャサリンが嫁入りの際、ネリーを無理にスラシュクロス屋敷に伴う際に一つの頂点に達し、ネリーはとうとう彼女との権力闘争に敗北を喫することになる。

私はキャサリンについて嵐が丘からこちらへ移るようにと言われ、とうとう説き伏せられてしまいましたが、実は嫌でならなかったのです。ヘアトン坊やはそろそろ五つになるところで、私は字を教えかけていたのです。別れるのが辛くて坊やと私はさんざん泣いたのですが、キャサリンの涙の方が強かった(more powerful)のです。キャサリンは、私からついて行くのを断られ、また私にいくら頼んでも無駄だと分かったと、兄や夫に泣きつきました。エドガーさんはお給金をはずむから来てくれと言うし、ヒンドリーはすぐに荷物をまとめろと命令します。女主人が居ない家に女手はもう必要ないと言い、ヘアトンはい
ずれ副牧師に面倒を見てもらうとのことでした。こうなっては、私の
とるべき道はただひとつ、命令に従うしかありません...それ以来あの子は赤の他人になってしまったのです...あの子はもうエレン・ディーンのことなどすっかり忘れていることでしょう、あの子は私にと
ってこの世で何よりも大切なものだったし、このエレンはあの子にと
って何より大事なものだったのに! (9章,p.129)

兄からも'女主人'としてはっきりと認められているキャサリンは、兄と夫両方の権威を援用するという間接的な形ではあれ、とうとう「命令されるのを我慢などしない」ネリーを服従させるのに成功したわけである。キャサリンは故意にではなくともネリーが嵐が丘で築いてきた人間関係を根底から崩

した上、ネリーにとって大切な自己確認の手段である子育ても奪い、結局ネリーの存在基盤にシリアスなダメージを与えた事になる。自暴自棄のヒースクリフに乳兄妹の親近感から懸命に仕え続けた苦労も、嵐が丘邸の家政を支えてきた働きも、当の主人から“due applause”を受けるところか不必要だとされる。このように「踏みつけられた」ネリーが、スラッシュクロス屋敷に移ってからキャサリンに対して「怒りっぽい」態度を取っているのも無理はない。しかしそれもキャサリンの気嫌を損ねることを恐れるエドガーから無礼だと咎められ、彼女は我慢せざるを得なくなる。ネリーの中に蓄積されているこのような無念さは、ヒースクリフ帰還の後からキャサリンの死に至るまでの期間、キャサリンに対する冷淡さ、無理解の感情の下地となり、キャサリンの存在基盤を崩す遠因となっているのである。

ヒースクリフの帰還とともに再度、ネリーとキャサリンの間に価値観／自己の基盤の対立が起こる。キャサリンがエドガーの妻でありながらヒースクリフと交際を始め、それを「結婚に伴う義務」に反する無節操な行動と考えるネリーはキャサリンへの反感を強め、ヒースクリフに対する不信感も手伝って、何とか彼を追い出し、キャサリンにも交際を止めさせて元の夫婦の枠に押しもどそうと働きかけ始める。キャサリンを‘懲らしめよう’とする彼女は、ヒースクリフを遠ざけると同時に、求婚の際と同じようにエドガーと彼女の間に入ってエドガーをキャサリンから引き離そうと試みる。第11章から14章、ヒースクリフのイザベラ誘惑からキャサリンの死に至るまで、ネリーは、能動的／意志的な沈黙と、一種の情報操作によって事件への介入を行うが、その行動は常にエドガーとキャサリンの間を裂き、キャサリンを精神的に追い詰める作用をしている。例えばネリーは独断でエドガーにイザベラ誘惑の事件を報じ、キャサリンとヒースクリフの交際を禁止するよう彼に忠告するが、彼が台所に踏み込んで三者の間に騒動が起こると自分が告げ口したことを隠してしまい、それによってキャサリンは夫が嫉妬から立ち聞きをした卑劣漢だと思い込む。その後もキャサリンの怒りを自己中心的だと判

断するネリーは、キャサリンのエドガーへの伝言を差し止めたり、エドガーにキャサリンの発作は芝居だと言ったり、あるいは部屋に閉じこもったキャサリンを放置したりするために、エドガーは妻の精神状態を正確に把握できず、また妻のほうも夫の心配を知らぬままとなり、両者の間の亀裂は深まってしまう。中でもネリーが与えた最も深刻な影響は衰弱したキャサリンに対してエドガーは無関心だという考えを故意に植えつけた事である。実際のエドガーはネリーの描写によると「妻の名を聞きたくて溜め息を繰り返し」「開きもしない本に囲まれ(among the books *that he never opened*)」、妻との和解を待ち望んでいるのだが、ネリーはその状態の一部分“among the books”だけを伝え、彼の心配は隠すことで、書斎でのうのうと読書に耽り妻のことなど全く気にかけない夫の姿をキャサリンに描いて見せる。この時点までキャサリンの激昂は彼女の抱くエドガーの印象の悪化に応じて高まっていたのだが、ネリーが歪曲したこの一片の情報はキャサリンの精神に決定的なダメージを与え、譫妄状態を引き起こすのである。

本に囲まれているですって！ 私が死ぬというのに！...本当に彼は私の命がどうなっても全く無関心なの？...冷たい顔をした人達に囲まれて死んでいくのは、何て悲しいことでしょう...エドガーは重々しく私の臨終を見届け、それから家に平和を取り戻したことを神に感謝して、本の中に戻るのね！ ああ、私が死にかかっているのに、本など読んでいられるなんて、一体そんな感情を何と呼ぶの？」彼女は私の話から、リントンさんが静かに諦めてしまったと考え、耐えられなかったのです。のた打ち回り、熱病的な心の乱れはいよいよ募って狂気となり、枕を歯で噛み破りました。(12章, pp.159-60)

ネリーの情報を信じてしまったキャサリンは夫に絶望し、彼が来た時にも「あなたにもう用はないわ、エドガー。あなたを望んだのはもう過ぎたこと。

本の中にお帰りなさいよ。慰めがおありで結構だわ。私の中にあったあなた
のものは皆無くなってしまったわ...と拒絶する。ネリーの介在はこの夫婦の間の最終的なクサビとなったのである。

何故ここまでエドガーの無関心が彼女を絶望させたのだろうか。キャサリンがエドガーと結婚したのが「富と安楽に魅かれて」であったならばここまで衝撃が大きいはずはない⁷⁾。この場面のキャサリンの行動を芝居だと思うネリーが見落としているもの、それはキャサリンのエドガーに対する愛情の本質である。キャサリンにとってエドガーの愛情は自己の存在基盤として二つの点で非常に重要である。一つは、精神を支える肉体としての必要性。生を支えるにはその根拠に何らかの精神的な価値が無くてはならないが、現実の世に生きるためには同時に肉体的／社会的な価値も不可欠である。ヒンドリーの専政下にいたヒースクリフには教育も財産もなく、ヒースクリフと結婚してはキャサリンも彼も乞食になるしかない——つまり望むべき社会的な自己実現は不可能である。キャサリンの精神的価値であるところのヒースクリフには満たせないこの肉体的価値の必要を補うのがエドガーの存在なのであり、彼との関係を通して初めてキャサリンは（そしてキャサリンの考えではヒースクリフも）社会の中で具体的な生活を送り、自己を実現することができるのだ。

もう一つの大事な点は、エドガーの愛情自体の価値である。彼は単なる媒体や手段ではない。下男に身をおとされて以降ヒースクリフはずさみ、キャサリンに対し愛情表現もしなければ語りかけることもしない。言わばキャサリンにとって内奥の自己の声が聞こえなくなりそうな状態である。だから余計に彼女の自己を認め明確な愛情表現をするエドガーがキャサリンにとって貴重になるのである。岩は永遠に続くものではあっても、岩だけでは人は生きられない。生きるためには緑の木による憩いが欠かせないように、キャサリンにとってのエドガーの存在は不可欠であり、そのような愛を与えてくれるエドガーに対するキャサリンの愛は真剣で誠実なものである。つまり、

キャサリンが守ろうとしていた「私の中にあったあなたのもの」とはエドガーに対する愛情、エドガーとの絆であり、キャサリンの怒りは当のエドガーがそれを理解せずに彼女を非難するが故である。彼女が錯乱の過程で求め続けるのがヒースクリフではなく、エドガーの愛情の再確認であるのもうなずける——言わばここでは、魂が肉体の存在の支えを求め叫んでいる。しかるにネリーの情報操作によって肉体が魂に対して無関心だと宣告されたため、魂も肉体に見切りをつけざるを得なくなる訳である。キャサリンにとって自分の存在のバランスそのものだったヒースクリフとエドガーとの関係が崩されては、自己はもはや生き続けられなくなってしまうのである。

ネリーが断ち切ったのはキャサリンとエドガーの絆だけではない。彼女はキャサリン錯乱の場のあと、ヒースクリフの所に出向いてキャサリンとの交際を断念するように忠告するが、その際病に変わり果てたキャサリンに対するエドガーの愛情を「否応なく連れ添わなければならない方」の「世間一般の人間愛と義務観念」と要約してヒースクリフの持つエドガーの印象を殊更悪化させ、これが彼とエドガーの最終的な決裂を生むきっかけになる。さらにヒースクリフがスラッシュクロス屋敷に来た時には、エドガーに自分が彼を手引きしたことが露見するのを恐れ、大声をあげて必要以上に事を荒立ててキャサリンに致命的な衝撃を与える。その後キャサリンの意識は二度と戻らず、ヒースクリフとエドガーは憎悪し合い、キャサリンが望んだ自己のあり方、彼女が保ちかけていた平安 (tranquility)⁸⁾ は最終的に破壊されてしまうのである。キャサリンの自己の崩壊は、彼女の希求した自己保持の仕方にもそもそも無理があったからだとか、悲劇はキャサリンがエドガーを選択した時点で定まっていたのだとする説が多い。だがエドガーは妻の交際をしつづぶながらも認めていたのだし、ヒースクリフはヒースクリフで、キャサリンを悲しませるなら一切身を引くと言明している事から判断すると、この三者の間に現実的なバランスを見出す可能性は確かにあったと言える。たとえいつか崩壊したにしても、このような早急で悲惨な終わり方はしなかったであ

ろう——ネリーに責があることはやはり動かせない事実なのだ。

＊

ネリーとエドガーの会話でネリーの行動の実際を悟ったキャサリンは「ああ！ネリーは裏切りを働いていたのね！ネリーこそが私の隠れた敵だったんだわ！」と叫ぶのだが、ネリーがキャサリンにとって敵だっただけではない。彼女もまたネリーの敵だったのである。ネリーはキャサリンに抑圧され、ヘアトンを奪われる。家庭に築いていた人間関係も、また内面の大事な信条も、文字通り「踏みつけられて」しまう。一方キャサリンはキャサリンでネリーの介入／介在によりヒースクリフもエドガーも失い、内面の自己のあり方も外的な人間関係も破壊され、死に至ってしまう。つまりこの二人の女性は互いに意識せずとも、自分の依拠する信条を貫いて自己を全うせんとしつつ互いの存在を脅かし合う、まさに「隠れた敵」同士だったのである。

第3章 平凡さの深層

第1章でロックウッドが述べる次のような言葉はさりげなくネリーの特徴を示している。

僕の正餐は十二時から一時までの間だ。家政婦はこの家に付いていた親切な婦人だが、僕が五時にしてくれというのを理解できない、いや理解しようとししないのだ。(could not, or, **would not** comprehend)

(2章,p.51)

第2章で見てきたネリーの言動は常にこの‘would not’、つまり意志的な姿勢に貫かれていた。ままごと遊びの時代にも、(“*I would not bear slapping and ordering*”)第8章でつねられた際の言葉、“*I’m not going to bear it!*”、また第34章で死の間際のヒースクリフに共に居ることを求め

られた時に“I had neither the nerve nor will to be his companion”と断る際にも、彼女のそのような姿勢は現れている。もう一つ注目すべきことは、ネリーは常識家ではあっても、単に常識レベルで判断する能力しかないのではなく、‘理解しようとしな^い’、つまり意志的に自分の常識に固執している点である。ロックウッドに食事や起床の時間を強要するように、人に合わせて自分の信条を変えるよりも信条に合わせて人を変えようとするネリーは、自分の内にある‘人はかくあるべし’という枠に合わぬものに出会った際、対象に合わせて己の枠を広げることを頑なに拒み、逆に相手を枠内に押し込めようと働きかけるのである。

ネリーが自分の対等性と、自己の価値基盤を保持せんとする動機に基づいて、個人としての意志を持って行動している事、彼女の人生が周囲に影響されているのと同時に、彼女もまた周囲の人間の生に深く係わりを持っている事は既に見た。ここでは一步進めて彼女のこのような自己の枠へのこだわりが何に由来しているのか、その大本の原因を探ってみたい。

この問題を考えるには、ネリーの孤独にもう一度触れて考察しなくてはならない。ネリーの孤独には、家族や友人、相談相手がいないということや^り、主家の中で存在が周縁化しているという具体的な疎外／孤立のほかさらに深刻な孤独——周囲が彼女を独自の感情と意志を持った一個の個人として尊重せず、時に機械のように扱うという非人間化の孤独がある。ネリーがこよなく大切にしていたヘアトンから引き離された際、彼女の欲求や感情がヒンドリーたちに無視されたことは第2章で見たが、このような扱いはそこに限ったことではなく例えば告白場面においても見られる。キャサリンの熱っぽい告白の導入部において、その直前に彼女に殴られているネリーは「はっきり理由があって」この年下の娘に対して怒りを抱き謝罪を期待している。が、キャサリンの方は自分の悩みに対する同情を求めるのみで、ネリーの怒りを全く考慮に入れていない。というより、そもそもネリーが怒るということさえ可能だと感じていない。キャサリンはここでネリーに、自分

の結婚の決断の正誤を問うてはいるが、結局ネリーの意見を考慮に入れる訳ではない。彼女はネリー個人の意見を尊重して彼女の承認や忠告、あるいは許可を求めているわけではなく、「他に相談相手がなく」「秘密を守って」貰おうとしているに過ぎない。キャサリンにとって、ネリーは相談相手というより、他では話せない真意を吐き出し心の安定を保つ為の地面の穴や樹木のうろに等しいのである。

ヒースクリフにしても同様である。彼が三年の失踪の後帰還した際、彼の関心の一切はキャサリンに向けられており、昔から彼を世話し、気にかけて、庇ってきたネリーには目もくれない。驚きと懐かしさで語りかける彼女の感情を一顧だにせず、ただ「行け、俺の伝言を運ぶんだ！」と威圧的に要求し、ネリーを伝達のための機械の如く扱うのみである。ヒンドリーの死後ネリーがヘアトンを引き取ろうとするときも、また病後のキャサリンに会うため手引きとしてネリーを利用するときも、後に小キャサリンを巽に掛けるときも、彼はネリーの感情や意志を無視し、踏みつけ続ける²⁾。エドガーもまた例外ではない。彼はネリーにとってアーンショウ氏と同様少しは彼女を尊重してくれる存在だったが、それでも常に彼女よりキャサリンを優先し、また適切な対応をしなかった点で自分にも妻の錯乱に責任があるにもかかわらず、結局全ての責をネリーにかぶせるという勝手な振舞をする。

ネリーの場合、誰からも信頼され味方だと思われるということは、裏を返せば彼女個人の意見や意志は無視され、独自性を考慮されないということである。彼女は周囲の人間にとって‘個人’ではなく、一種の‘nobody’に過ぎないのだ——彼女は召使仲間のジョウゼフにまで“nowt”、つまりnothingと呼ばれてしまう。子供の頃、土産を約束したアーンショウ氏のことをネリーが「旦那様は私のことを忘れませんでした。あの方は親切な心の持ち主で…」と表現するが、この昔の主人の他は、彼女の存在を認めその感情と欲求を顧みてくれる人間は誰もいない。対等な立場から召使となり、さらにまるで伝言を運ぶ機械であるかのように周囲に非人間的に扱われていくネ

リー、周囲の命令によって自分の欲求を抑圧せざるを得ないネリーが、彼女の基盤を保持しようとする態度を強めていくのは当然なことではないだろうか。

V.S.プリチェットは「ネリーは自動的に(*automatically*)戦闘位置に着く」⁴⁾と評したが、本来‘自動的に’行動する人間など居はしない。ネリーも彼女なりの動機と感情、特に生い立ちから来る対等意識及びそれが抑圧された故の孤独感が生む、個人として認められたいという欲求によって発言、行動しているのである。我が子のようなヘアトンを奪われ、働きに対しても正当な評価を受けられず、誰にも個人として重んじられないネリーの無念さ、そしてそれを跳ね返そうとする彼女の一貫して意志的な態度はジェイン・エアがロチェスターに向かって叫んだ言葉と深く共通するものを持っている。

あなたにとって私がとるに足らぬもの(*nothing*)になっても私がここに留まっていられると思うのですか？ 私が自動人形(*automaton*)だとも思うのですか？ 感情を持たぬ機械だと？ 口からパンの一切れを引たくられ、盃から生命の水の滴を叩き落とされてもじっと我慢できるのだと？ 私が貧しくて目立たず(*obscure*)、美人でもなくて、ちっぽけなものだからといって私に魂も心情も無いとお考えですか？ 間違った考えです！——私はあなたと同じだけの魂を持っています——そして同じ程豊かな心情も！…私は今、慣習とか因襲を通して話しているわけではありません、肉体を通してでもありません。あなたの魂に呼びかけているのは、私の魂なのです——まるで、私達が墓を通り抜けて、神様の足元に対等に立ったときのように——そして今ここに立っているように。

(『ジェイン・エア』23章,p.281)⁴⁾

ネリーとジェインの相違は、対等意識をもった自己主張がジェインのように「魂から魂」へ直接訴える形を取らぬ点である。勿論ネリーはその立場上、

自己主張しようとしても主人から妨げられることに甘んじなければならないという事情がある。例えば彼女がヒースクリフのイザベラに対する振舞を見て非難の声を上げたとき、キャサリンは「人が聞いたらおまえ〔ネリー〕のほうが女主人かと思うじゃない! . . . 分を弁えて引っ込んでいるもんだわ!」（11章, p.150. 傍点部は原文イタリック）と吐りつけ、ネリーの直接の表現を許すまいとする。だが彼女はその境遇ゆえに意志を通すことを諦めたりはせず、かえって召使という立場の制限を逆手に取って、いくつかの工夫で積極的に自分の意志を通そうとしている。

まず彼女は意識的／無意識的に自分の欲求を周囲のそれにすり変え、‘他者のために行動する’のだという大義名分を掲げる事によって自己主張を正当化する。意識的な例は、ネリーがヒンドリーの死後ヒースクリフからヘアトンを取り戻そうとして「旦那様〔エドガー〕がその子を引き取るから連れて来いと私に言った」と一種の嘘を言う場合などである。この時彼女は明らかに自分の欲求を通すためにエドガーの権威を用いている。さらに、彼女はヒースクリフをスラッシュクロス屋敷から追放して元の平安を取り戻そうとする際、エドガーの為だとして行動を続けるが、実際に彼女が求めているのは、自身が望む‘平安’⁹⁾である。ヒースクリフに対する憎悪も反感も、エドガーの物である以前にまず彼女のものだ。ヒースクリフの存在が「絶え間ない悪夢であった」彼女は、昔ヒースクリフに自分の羨望や妬みの感情を投影したように、エドガーに対して自分の不安や怒りを投影し、「旦那様も私と同じ気持ちであったと思います」「旦那様にはヒースクリフの本当の性格が分かっていたのですね」と繰り返し、主人のために行動する召使の型を取り続ける。キャサリンに対する場合も同様である。ネリーが「彼女の我が儘 (way-wardness) で、旦那様の悩みを二倍にしたくはない」とキャサリンの伝言を差し止める時、我が儘だと断じているのはエドガーではなくネリー自身だし、キャサリンが意識を失った際「他の人たちの重荷になり続けるより、死んでくれた方がずっといい」と考えるとき、‘他の人’とは実は自分のこ

とである。だがネリーが大義名分を盾に、自分の望む方向に事を運ぼうとしていることには周囲も彼女自身も気が付かない。

前章で見たネリーの情報操作も、彼女の召使という型の中での一種の自己主張といえる。ネリーは相手に直接自分の意見を言う代わりに、他の人が与える情報に改変を加えて、当の相手から自分の思う通りの反応を引き出すとする。キャサリンにエドガーの無関心を強調して反省を促そうとするのもその手法だし、ヒースクリフにキャサリンを断念させようとしてエドガーの妻を看病する態度を歪めて伝える時も、また口論の後でヒースクリフを屋敷から帰らせようとしたネリーが、「ちょっと嘘をついて(*forming a bit of lie*)」、エドガーがヒースクリフと対決せんとやって来ることを隠すのも、同じ手法に則っている。

ネリーはこのように自分の望む方向にことを運び、主人や女主人の意向や判断よりも自分のそれを優先していくのだが、それが顕にならないように、召使の型を保ちながら、芝居による自己保身をする。一つの例としては彼女が第13章でイザベラの駆け落ちを黙認し、主人に事実を伏せていたネリーが、事が発覚した際エドガーに命じられてイザベラの不在を「恰好を付けるために(for *form's sake*)」確認し、主人に茫然とした顔を作って見せることが挙げられる。キャサリンとヒースクリフの口論をエドガーに告げ口し、その行為をキャサリンから隠すのも同様の行為である。主人や女主人の判断よりも自分の判断を優先させ、彼等の権威をないがしろにしている事、自分の欲求を実行している事をネリーは召使としての型によって被い隠してしまうのである。ヒースクリフは後に第22章でネリーの「裏と表の使い分け(*double dealing*)」が嫌だと述べている。これを言う際の彼自身が、小キャサリンを騙すべく *double dealing* をしているために見逃されやすいが、これこそネリーの真実をついた言葉なのである。芝居にせよ、情報操作にせよ、ネリーが召使の型の中で行動を続けるとき、自然彼女は周囲の人間に対して裏表のある人間となり、その行動は彼女が以前批判したキャサリンの無意識的な二

重人格 (double character) 的行動と相似し、かつキャサリンを死に追い詰めるという極めて深刻な影響を及ぼす力になってしまうのである。

その意味で、キャサリンの錯乱のさなかの次の様な幻想はまさにネリーのあり方——召使という型を保ちつつキャサリンの自己の基盤を崩そうとしている——を暗示したものであったのだ。

「御前の中に老婆が見えるわ、ネリー」彼女は夢見心地に続けました。
「白髪頭で、腰が曲がってて。このベッドはペニストン岩の陰にある妖精の洞穴よ、そしておまえは私達の牝牛を傷付けようとして、妖精の矢尻を拾っているの。ただ私がそばにいる間は、羊の毛を集めている振りをしているのよ。それが五十年先のおまえなのよ。」⁶⁾

(12章,p.161)

ジェイン・エアは「慣習や因襲を通して (through the medium of customs, conventionalities) ではなく」と強調したが、ネリーの場合の自己主張は、まさに召使の型というカスタムと、常識や道徳という慣習／因襲の言葉によって、あるいは介入という行動で具体的にキャサリンとエドガーの間に立ちふさがるという「肉体を通して」のやり方によって成されたのである。ネリーが彼女なりの善意で事を運んでいることを否定する訳ではない。彼女の行為は明確な悪意に基づいていない点でイアーゴウとは決定的に異なっている、がしかしそれ故に害がないかと言えばそうでもない。召使という形態・殻の中で常に一種のゆがみを持って発揮され続けた個人の意志は、隠然とした力を持って周囲の人間の運命に関わっていたのである⁷⁾。

結 論

『嵐が丘』冒頭のロックウッドが見る第一の夢は要約すると次の様なものだ。夢の中のロックウッドはジョウゼフに導かれ家路を辿るうちに、教会でジェイベス・ブランダム牧師による罪についての説教を聞く羽目になる。彼が牧師の退屈な説教こそが赦すべからざる決定的な罪だとして牧師を攻撃すると、牧師は逆に彼の反逆こそが最終的な大罪だと言い、彼を弾劾することは聖徒の誉れだとして会衆に彼を攻撃するよう呼びかける。

この終わりの呼びかけで全会衆は手に手に巡礼の杖を振り上げて、どっと僕の周りに押し寄せてきた．．．皆がひしめき合っている中を棍棒と棍棒がかち合い、僕を目がけて打ち降ろしたのが、他人の頭を打つ。たちまちにして殴る音と殴り返す音とが会堂中に響き渡り、皆が皆、隣の人間に打ってかかるという騒ぎになった。（3章,p.66）

この夢は従来難解とされ、論議を呼んできた¹⁾。しかし‘巡礼’がよく人生行路に喩えられ、‘巡礼の杖’がその途上で支えにする信条や主義の比喩として用いられる事を念頭に置き²⁾、またジョウゼフの持つ巡礼の杖が実は‘棍棒(cudgel)’であって、‘take up the cudgel’に‘自分の意見や信条を守るべく必死で論戦する／戦う’という比喩の意味がある事を考え併せる時、この夢は『嵐が丘』の作品世界における人間たちの葛藤の様を示す寓意画として解釈する事が可能になる。即ち棍棒を振り回す会衆たちは、自己の信条を振りかざしその主義・主張を他者に強要せんと戦い傷付け合う、登場人物たちの姿そのままなのである。当初の目標と異なる相手を傷付けてしまう点や、各自が大義名分を立て己の正しさを疑わぬ点、また誰に真の責任があるか決定し難い面においても、夢の中の戦いと『嵐が丘』全体の内容と一致している——この夢はまさに物語の縮図イビクミなのだ³⁾。

だが『嵐が丘』は決して単なる厭世的な「破壊的な人間の荒地であり廃墟」⁴¹⁾の物語ではない。何故ならこの戦いの火花——葛藤、あがき、苦闘、奮闘を通してこそ、生々しい生のエネルギーが圧縮されて強い光を放ち、人間の諸相が鮮やかに浮かび上がるのだから。窓から入ろうとするキャサリンの亡霊を追い払ったのと同様に小キャサリンへの想いを押しとどめて振り払い、『嵐が丘』の戦いに巻き込まれるのを忌避し続けたロックウッド、彼のみが空手で去るという事実は、作者が、葛藤の中にこそ在る人々の生の意義を肯定していることを逆説的に示すと言えるのではないだろうか。

＊

主人のためという大義名分を立て、己を‘the Way’に則った聖徒と見做し、自分の信念という棍棒を振り上げて他者を追い詰めていったネリー・ディーンもまた、この夢の中の会衆の一人であった事を忘れてはなるまい。ネリーは確かに個人より協調を、利己より利他を、葛藤より調和と平安を、動より静を志向する。だが皮肉なことに、彼女がその信念を推し進めていく過程で、逆に静より動を、平静より葛藤を招き、結局個人としての自己を顕にしている。平凡だと言われたり、物語に関わっていないと思われたりするネリーも、本論で見たように実は強い個性を持ち、孤独と抑圧に耐えつつ自己主張をし続け、周囲の人間との葛藤を生き抜いてきた人間、一人のラウンドなキャラクターであったのだ⁴²⁾。

キャサリンやヒースクリフのような目につきやすい個性とエゴも描けば、ジョウゼフの独善的信仰の持つ狭量さやエドガーの優しさの裏の専横さも見逃さない作者エミリーは、ネリーのような一見平凡な人間に潜む個性をも描き、善意の人間の持つエゴティズムに鋭くメスを入れているのである⁴³⁾。

〈注〉

・翻訳は、中村佐喜子、工藤昭雄両氏のもを参考にした。ですます調で翻訳するのは語りの形式上やむを得ないが、実際のネリーの言葉使いはさほど丁寧なものではない。ネリーの言葉をだ・である調で訳せば、読者がうける印象もかなり変わるであろう。

・今回は紙幅の都合によりネリーの個性を浮び上がらせることを主要目的に据えたため、物語りの前半に焦点を絞った。ネリーを重要人物として読む場合、ヒースクリフや小キャサリンについての再考や、嵐が丘の悲劇性自体の解明が必要となるが、これらについては続編に述べることにする。

序 ネリー・ディーンに対する様々な評価

- (1) Emily Brontë, *Wuthering Heights*. ed. Daiches(London: Penguin Books, 1965), Ch.22, p.266.

以下のテキストからの引用文は全てこの版に拠る。文中の下線、傍点、及びイタリック体は、特に断りがない限り筆者によるものである。

- (2) Charlotte Brontë, 'Editor's Preface to the New [1850] Edition of *Wuthering Heights*' in the Penguin edition, p.39.
- (3) 例えばウォード夫人はネリーの性格上の問題点を指摘し、この矛盾は作品のプロットが進むためにやむを得ないものだが作品の欠点の一つだと述べている。

Mrs Humphry Ward, 'Introduction to the Haworth edition of *Wuthering Heights*, 1900' in Miriam Allott(ed.), *Emily Brontë: Wuthering Heights* [casebook series] (London: Macmillan Education Ltd, 1970), pp.108-9.

- (4) シュナミも同様にネリーのキャラクター像を分類・整理している。彼もネリーの行動の事件への関わりをかなり詳しく指摘しているが、彼女の動機については追及していない。

Gideon Shunami, 'The Unreliable Narrator in *Wuthering Heights*' in *Nineteenth-century Fiction*[以下NCF], vol.27, no.4(March, 1973), pp.449-468.

(5) Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel, Volume 1* (London: Hutchinson University Press, 1967), p.132.

(6) David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*(London: Constable & Co Ltd, 1934), p.176.

リーヴィス、ハーディそれぞれのネリー批評は以下の部分を参照されたい。

* Q.D.Leavis, *Collected Essays I: The Englishness of the English Novel* (London: Cambridge University Press, 1983), pp.233-235.

* Barbara Hardy, *Forms of Feeling in Victorian Fiction*(London: Peter Owen Ltd, 1985), pp.99-100.

ネリーを標準の人間として捉える解釈には次のものもあげられる。

* Muriel Spark & Derek Stanford, *Emily Brontë: her life and work* (London: Peter Owen Limited, 1953).

* Mark Schorer, 'Technique as Discovery' in *The Hudson Review*, 1 (1948).

(7) '... Nelly Dean is patriarchy's paradigmatic housekeeper, the man's woman who has traditionally been hired to keep men's houses in order by straightening out their parlors, their daughters, and their stories.'

* Sandra M. Gilbert & Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*(New Haven: Yale University Press, 1979), pp.291-2.

(8) 'Nelly Dean, by contrast, figures as the 'phallic mother', as the sign of maternal power and social authority, agent and upholder of the social and sexual Law, which intervenes to forbid such tabooed incestuous relationships.'

* James H. Kavanagh, *Emily Brontë* (Oxford: Basil Blackwell Ltd, 1985), p.xi.

(9) James Hafley, 'The Villain in *Wuthering Heights*' in *NCF*, vol.13(1966).

ネリーの行為が周囲に悪影響を及ぼしたという彼の指摘は当を得ている。しかし悲

劇の原因を全て彼女一人に帰してしまうのは強引のそしりを免れないし、さらに彼女のネガティブな言動の理由についてはただ彼女が悪人だった故、と片付けている。本論では彼女の言動に確かな動機／原因／経緯があることを証明することを目指す。

- (10) '[Nelly and Lockwood] are detached and normal, . . . undistorted by the emotions of those actors who were involved in it.' Cecil, *op. cit.*, p.186.
- (11) たとえばフレイザーは、ハフリーの説に対抗し、ネリーは暴君に対して他者のための自由を勝ち取ろうと戦った善人だと弁護している。John Fraser, *The Name of Action: Critical Essays* (London: Cambridge University Press, 1984), p. 71-80.
- (12) 'They[Joseph and Nelly]are character parts in the regular English tradition of Fielding, drawn in the flat rather than the round.' Cecil, *op. cit.*, p.175.
- (13) John K. Mathison, 'Nelly Dean and the Power of "Wuthering Heights"' in *NCF*, vol.11, no.2(September, 1956), p.107. マシソンはネリーの鈍感さを彼女の平凡さの故とする説の支持者だが、特にその原因として彼女の肉体的な頑健さを挙げ、「ネリー・ディーン唯一にして最大の特徴は健康であることだ」(*ibid.*, p.115)とまで断定している。肉体的頑健さは確かに一つの要因ではあるが、それに全てを帰するのは無理がある。
- (14) Barbara Hardy, *op.cit.*, p.103.

第1章 登場人物としてのネリー、その特質

- (1) *Wuthering Heights*, 1章, p.46. ロックウッドの描写によると、通常は居間の一部である台所が、嵐が丘邸では'forced to retreat altogether into another quarter'となっている。このような詳しい台所の位置の指定はネリーの立場と絡んで興味深い。
- (2) 自営農のヨーマン階級は土地を保有せぬ階層とは一線を画する。貧乏人の娘であっても、高度な本を読んだり人に読み方を教えたりすることができるという点で、ネリーはヨーマン階級の下での'labourer'階級ではない。ネリーの読書量の多さ、自

尊心については8章の「私は確かに自分のことをしっかりした、分別のある類の人間だと思っていますよ。」以下の言葉を参照。

- (3) 英国では召使と一口に言ってもいくつかの階層に分かれる。女性の召使の階層が Lady's Companion-Housekeeper-Cook-Maid-'Slavey' と分かれる中で、ネリーはアーンショウ家においてはhousekeeperとcookを兼ねた存在である。家政婦は比較的力を持ち、リントン家において彼女が小キャサリンの手紙を盗み読みすることから分かるように、家中の鍵を預けられる程信頼される。

* ネリーのモデルはブロンテ家に長年仕えたタビー・アクロイドであるという説があるが、言葉遣い・知識量の点でネリーは強いヨークシャーなまりを話したタビーと明確に異なる。これは両者の階層の違いを表している。タビーの素朴さは例えば『ジェイン・エア』の中の召使ハンナなどに投影されている。(なおネリーとヨーマン階級、ネリーのモデルについてはブロンテ研究家クリストファー・ヘイウッド氏[岡山大学教養部英語科]の近日発表される論文・著書を参照されたい)

- (4) ネリーはフランススについては'She had neither name nor money to recommend her'(6章, p.86)と述べ、ヒースクリフについても'a nameless man'(10章, p.140)という言い方をしている。

- (5) 'the small power I still retained over the unfriended creatures'(Wuthering Heights, 6章, p.87).

- (6) ネリーの語りの中には、この台所の箇所と同様に、客観的に自分が何をしたかは述べているものの、その時相手に対していかなる感情を抱いたかがわざと空白になっている箇所が幾つかある。結婚後のキャサリンにヒースクリフ帰還を知らせる場合、またイザベラ逐電の報を遅らせる場合などが例にあげられる。このような空白の箇所をネリーのそれまでの経験と照らし合わせて読むとき、その感情が込められるように設定されている。ロックウッドの語りの挿入部分(第8, 9, 14章)が常に何らかの形でネリーの語りの質を解明する手がかりを与えている。

- (7) ネリーは語りの終わりに近い部分で、小キャサリンとヘアトンの結婚に言及し、二人の結婚式の日には自分は誰をも妬む(envy)ことはないだろう、イギリス一の幸福な女になるだろう、と述べる。この言葉はネリーの勝利宣言であると同時に、

この幸多いとは言えない女性が‘妬み’という感情と生涯無縁ではなかったことの証左ともなっている。

- (8) ネリーは義務という言葉を多用する。彼女の信条は「義務を果たすものは最後には報われる」(25章, p.289)ということである。家事 (household duties) やヒンドリーへの忠告等を義務と呼ぶのは理解できるが、彼女の喜びとする小キャサリンの世話を‘義務’とよんでいるところを見ると、彼女が義務という観念を強く持つ余り、自分の欲求をも義務という枠組の中でしか把握できないとも言える。逆に言えば、彼女が義務という言葉を被せて遂行する各行動に潜む彼女自身の自我に注意が払わなければならない。
- (9) *Wuthering Heights*, 7章, p.101. 17章, p.215.
彼女の他人への賞賛は、‘He is quite a Christian!’(10章)である。
- (10) *Wuthering Heights*, 34章, p.363. この忠告の裏には、自分は聖書を熟読し自己中心的生活を避け、キリスト教徒として天国への道にあるという彼女の自負、自信が伺える。

第2章 ネリーとキャサリンの相克

- (1) 原文‘in play’は‘ふざけて’とも取れるが、Bronテ姉妹が子供時代に小説の登場人物を演じて遊んだことを考え併せると、ここは役割を演じる遊びをしたと解釈した方が適当と思われる。(Father and children等そのままとは英国でも古典的な遊びである)
- (2) キャサリンが「このあたりの女王」になる歳が、ネリーが看護人/家政婦として自己を立て始めた年齢と一致するという構成は、この二人のコントラストを強調し、ネリーの側の反感の根拠ともなっている。
- (3) wayward (原義: ‘道はずれた者’) はネリーがキャサリンを形容するのに度々用いる言葉である。同じ「わがまま」でもエドガーについては‘selfish’であり、小キャサリンの場合は‘wilful’と形容しているにすぎない。
- (4) ヒースクリフとの完璧なる同一性はキャサリンの幻想であり、その幻想に対する固執が彼女の弱みになっていると言える。キャサリンの限界を彼女のセルフイメー

ジの欠如に求めるHelen Moglenの指摘は有効である。

- (5) 黙過したばかりか嘘をつき、異変に気が付きかけたキャサリンの注意をそらすという一見不可解なネリーの言動について、ワードはストーリー構成のための作為とし、シュナミやギルバート／グーパー、キャバナフは、ネリーがキャサリンに社会的に認められる結婚を選択させるためにヒースクリフを遠ざけた、即ちキャサリンを「守ろうと」したのだと解釈しているが、ネリーがキャサリンとエドガーの結婚を心底推奨している箇所はテキストにはない。
- (6) 'idol'は勿論恋の対象にも使われるが、この場合、save, doom, destiny, warning, waywardと併用されている為、相応しくないもの、正道に反するものに愛／崇敬を与えるという偶像崇拜の意味合いが強まっている。
- (7) 告白の際の「ヒースクリフと結婚すると落ちぶれる(degrade)」というキャサリンの言葉は、往々にして、社会的安楽を求める分別や階級の上昇欲に捕らわれた虚栄心の所産と解釈されるが、以下のような彼女の時代的制約／性差による制約は考慮されねばなるまい。
- i) 当時の英国国教会では養子と実子の婚姻を認めないため、ヒースクリフと結婚するには養子／実子の婚姻を認める長老派教会、即ちスコットランドに逃げなくてはならない。教育も財産も持たない若い二人が見知らぬ土地に駆け落ちすれば、確かに彼女の言うとおりの「乞食になる」以外にないのであり、理想的な自己を実現することは不可能となる。
- ii) 長子相続の制度下では受け継ぐ財産を持たない彼女にとって、兄ヒンドリーのよう婚姻によって伴侶の身分を引き上げる(upgrade)ことは不可能である。
- iii) 故郷を離れて大学教育を受け得た兄に比べ、彼女は才気があっても他の土地に出る可能性を持たない、即ち自力で身を立てる術も持たねば外に伴侶を求める可能性もない。エドガー以外の理想の男性の存在の可能性をネリーが指摘した際、「いたとしたって会えないわ」というキャサリンの答えは言い訳ではなく事実なのである（これらの点は、エリオットの*The Mill on the Floss*のマギー・タリヴァーを思わせる）。これらの制約がキャサリンを支配している点を考えると、『嵐が丘』はセシルの言う「ブレイクのように時・場所によって変わることはない、生の原初的

諸相に絞った」作品とは言い切れまい。

- (8) 「エドガーがあなたの訪問に腹を立てたのがやっとおさまって、あたしは安心して落ち着いてきた(secure and tranquil)ところだったのよ」(11章, p.151).

第3章 平凡さの深層

- (1) ネリーの母が八十才まで健在でネリーが四十三才になる以前に死んだこと、及び母親が最後まで丈夫で、おそらく他家に奉公していたらしいことが第22章で仄めかされている。しかしネリーの結婚、子供の有無については何も語られていない。第8章でミセス・ディーンと呼ばれる為、スラッシュクロス屋敷に移ってから結婚したと設定されているのだろうが、夫は早世したのか一切姿を現さない。子供に関しては居ないか、夭折したかのどちらかが考えられる。いずれにせよプロットに必要な部分以外は一切情報を与えない(ヒースクリフの失踪やその後三年間の生活、ヒンドリーの大学時代やフランセスの経歴等)のがエミリーの特徴であり、これらの記述の欠如がネリーの重要性を軽減することにはならないと筆者は考える。

・ネリーが「友達が多いくせに不満を言い過ぎる」とキャサリンを批判する箇所(8章, p.117)や、小キャサリンに対して家族や友人もおらず一人生きる寂しさを想像し、今の自分の幸福に満足すべきだと諭す言葉(21章, p.257)は常にネリー自身の身の上と彼女たちのそれを引き比べたものであり、裏にネリーの孤独感と不満を見ることが出来る。

- (2) ヒースクリフの帰還後の主人ぶりは、ネリーと彼の関係のもとの共通点(主人から踏みつけられる)故にかえて彼女の側に反感を引き起こしている。後半で彼女と彼の間で起こる、子供[ヘアトン、リントン、小キャサリン]の争奪戦は、子供が彼にとっては復讐の手段、彼女にとっては自己実現の手段という点で、実は彼らの個人同士の力争いである。彼女の主家の子らへの強い執着は、彼女の抑圧された自意識を念頭に置いて理解するべきである。ネリーを子供らを養育するにふさわしい'truly feminine nature'と'maternal impulse'の持ち主として'normal

maternal woman' と判じる Q. D. リーヴィスは、ネリーの歌う子守歌（9章）は、ネリーが亡きフランシスを哀れむもので同情心の豊かさを示す証拠としているが、逆にこれはフランシスにヘアトンを取り返されまいとするネリーの心情を示すものと取ることができる。

- (3) V. S. Pritchett, *Implacable, Belligerent People of Wuthering Heights* (1946).
- (4) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, (London, Penguin Books, 1985).
- (5) ネリーの '静けさ(tranquility, quietness)' への強い志向／傾倒はしばしば指摘されるが、それは自分の枠内に周囲を収めて、自己の基盤を保持しようとする彼女の傾向から来ると同時に、孤独ゆえに強く培った信仰にも強く影響されており、その天国観も彼女の人生における他者からの '愛と共感' の欠如ぶりを投影している。

これは私の独特なところかもしれませんが、死んだ人の部屋でおみとりを
 するときほど幸福を味わうことはありませんわ... 私は此の世も地獄も決して
 乱すことができない安らかさを見ます。無限の、影の無い来世——死者が既に入
 った '永遠'——が確認されたことを感じます。そこでは命は果
 てしなく続き、愛は無限の共感を得、歓喜は限りなく満ちあふれるの
 です。

(16章, pp.201-2)

この箇所死生観や、エミリーの詩に '肉体は牢獄' という比喩が多用され、キャサリンの死の直前の言葉にもその比喩が出てくる事を証拠に、エミリーの死に対する憧憬、生に対する嫌悪がよく指摘される。しかしネリーにしるキャサリンにしる又エミリーにしる、生への嫌悪を抱くにはそれなりの原因と過程があったことに注意を払わなくてはなるまい。

- (6) ネリーに 'artless' だと評されるキャサリンは、情報操作や芝居等の点で artful なネリーに現実的に對抗する術がない。牝牛 (heifer) には若い女性という意味もある) を傷付けられるままになった彼女と、ジョウゼフの牛を 'Black art' で殺したとおどかして彼の攻撃から身を守り、(2章, p.57) またヘアトンに対しても 'art' を用

いることが出来る小キャサリンの逞しさ、したたかさは対照的である。

- (7) 主人に内緒で狡猾に動き、動けば動くほど事態を混乱させる二股膏葉の召使や、恋人達の相談役でかつ手引きをする乳母はギリシャやローマの古典喜劇作家(メナンドロス、プラウトゥス、テレンティウス等)の時代からある伝統的ストックキャラクターのタイプだが、『嵐が丘』の新しさは、召使ネリーの動機や感情など内面を掘り下げ言わば内側からこのタイプを捉えた事にある。それは近代の自己意識の高まりの一つの現れと言えらるう。

結論

- (1) 夢についての種々の解釈については、次の論文を参照のこと。

- * Cates Baldridge, 'Voyeuristic Rebellion: Lockwood's Dream and the Reader of *Wuthering Heights*' in *Studies in the Novel*, vol.20, no. 3, pp.275-287.
- * Ruth Adams, "'*Wuthering Heights*": the Land East of Eden' in *NCF*, vol.13, pp.58-62.
- * Edgar Shannon, 'Lockwood's Dreams and the Exegesis of *Wuthering Heights*' in *NCF*, vol.14, pp.95-109.
- * Dorothy Van Ghent, 'On *Wuthering Heights*' in *The English Novel: Form and Function* (New York: Rinehart, 1953), pp.153-170.
- * R. E. Fine, 'Lockwood's Dreams and the Key to *Wuthering Heights*' in *NCF*, vol.24, pp.16-31.

暴力、あるいは近親相姦の主題と結び付けた解釈があるが、筆者には、キャサリン及びヒースクリフに焦点を当て過ぎた解釈に思われる。'棍棒'は全ての登場人物の手に握られているのである。

- (2) 信条を人生の支え即ち杖に喩える用法は、シャーロットが『嵐が丘』序文に付したエミリーとアンの小伝にも見られる。以下はアンが病に倒れてから死ぬまでの際の描写である。

"... it was by leaning on those Christian doctrines in which she firm-

ly believed, that she found support through her most painful journey.”

* Charlotte Brontë, Biographical Notice of Ellis and Acton Bell in *Wuthering Heights*, p.35.

この夢に通じる世界観が、エミリーのエジェ塾時代（『嵐が丘』執筆の約四年前）のフランス語のエッセイ「蝶」にも述べられている。

‘ . . . il faut que tout être soit l'instrument infatigable de mort aux autres, ou qu'il cesse de vivre lui-même . . . ’

「あらゆる生き物は他の生き物に対する情け容赦のない死の道具とならざるを得ない。さもなくば生きるのを止めることになる . . . 」

Emily Brontë, *Le Papillon* (Le II Août 1842) in Winifred Gérin, *Emily Brontë* (Oxford University Press, 1971), p. 272.

(3) *Wuthering Heights*, 33章, p.349.

(4) Mark Shorer, *op.cit.*, p.172

(5) 自分が責任の一旦を担うこの悲劇の過程で己の運命も又翻弄されていく点から、ネリーがこの物語に全人格的に関与した登場人物であることは本文で考察したが、さらに物語の後半にも目をやるならば、他の主要人物同様彼女も又自己の限界にぶつかる点で、物語に内面的にも関与した人物と言える事が分かる。マシセンは「ネリーは最後まで変化しない」としているが、ヒースクリフの死に恐怖の叫びをあげるネリー、「夜独りでこの家にいるのは嫌だ」と最後に嵐が丘邸を去る中年の彼女は、台所で独り己の絶対的正しさを疑わずにいた若き日の彼女ではもはやない。彼女が幽霊の存在を否定する語調の強さは、そのまま彼女の怯えの裏返しと取ることが出来る。彼女が一旦否定した疑い——悲劇の全ての責が己にあるのではないかという疑念が、ヒースクリフの死と共に再び甦ったと考えられないであろうか。嘲るような笑みを浮かべたヒースクリフの死顔が、彼女がそれまで保持せんとした枠組、即ち内なる存在基盤に対する打撃であったことは確かである。キャサリンやヒースクリフの死によって、彼女が支えとしてきた原理を動揺させる外在因は無くなった、しかしこの怯え、つまりネリーの内面的な動揺の因子は容易に取り除けまい——それはまさに亡霊の如く彼女につきまとうのでないだろうか。

- (6) つまり、ネリーがエドガーを批判する際の言葉「人は皆自分勝手なもの」(10章, p.132)は、結局彼女自身に跳ね返ってくる事になる。シャーロットのジェイン・エアが常に正しく清く描かれ、その欠点が作者に意識されていないのに対し、エミリーの場合、抑圧される側人間ネリーのエゴティズムを見逃さない点で、よりリアリスティックである。

* キャサリンとエミリーの性格上の相似点から、キャサリンが作者の分身だとはよく指摘されるが、ネリーも又作者の分身であると言ってよいだろう。孤独、家政の仕事等、実際はネリーの方が作者と状況は相似しているのである。